

2025年9月30日（火）

老球の細道 888号

9月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

かつて1年間に4回プレゼントがあった。誕生日、クリスマス、バレンタイン、そして父の日。今はクリスマス、バレンタインが消滅し、敬老の日（爺の日）が追加された。しかし、巷では「少子高齢化」が問題となり、敬老の日といえども胸を張って生きていられない。

今月時点で日本では100歳以上の人口が99、763人。2040年には約26万2千人になるという。孫をミニバス練習に送迎する時、車の中（少子高齢化）で話題になるのは「爺は何歳まで生きるの?」。私はすかさず「100歳まで生きるよ!」と答える。

今月は毎週バスケット行事が続いた。行事はもちろん、準備する日々も充実していた。今の生活を充実させ、その日を晩酌でしめれば100歳まで健康で生きられるかもしれない。

1・テレビから

◆「音の幅は人の幅」〈バイオリニスト服部百音：NHK 朝のニュース〉：音楽もバスケも人間的な成長があってこそスキルやプレイの向上を促進させる。人間の技は皆共通である。

◆「わしゃ死ねるもんかい。やらのやいけんことがひとつあるんじゃ。ノーモア、ヒロシマ」〈吉川清：NHK スペシャル『新ドキュメント太平洋戦争』〉：自ら被爆し「原爆一号」と呼ばれた平和運動家の言葉。敗戦後80年、被爆後80年、ますます言葉の重みを感じられる。

2・読書から

◆「世の中の人、二種類に分けられる。重大な危機に瀕したとき、ボールをほしいと思う、責任を負いたいと思うタイプと、誰か他の人にとってほしいと思うタイプ」〈ボブ・グリーン『マイケル・ジョーダン物語』集英社〉：クラッチシューターだったジョーダンは間違いなく前者であった。冗談であるが、わが孫たちにもそうあってほしいと思う。

◆「人生を進むことを自転車に乗っていることに例えるのですが、常にバランスを保つためにペダルをこぎ続けなければならない。そうしなければ前進しない」〈『月刊バスケットボール11月号』〉：今シーズンBリーグに新風を巻き起こすトステイン氏の言葉。

3・新聞から

◆「たどりつくことより、希望を抱いて旅を続けているほうが幸せなのだ」〈朝日：天声人語〉：宇宙物理学者ホーキング博士の言葉。ゴールにたどりついたら精神はしなびて死んでしまう。なかなか勝てなくても目標に向かって努力を続けることが毎日を充実させる。

◆「冒険や挑戦、その高い壁に挫けそうになる。でも、やり終えた時はたいしたことないな、と思える」〈朝日：加藤登紀子ひらり一言〉：自ら作る心の壁、「決めつけの刃」がハードルを高くする。試合をしてみるとたいしたことはなかったということは私も何度も経験した。

◆「スマートフォン持たないことの豊かさを思う日暮れのバスケットボール」〈朝日：天声人語：俵万智〉：こんなところにバスケットが登場びっくり。が、ミニバス試合、練習などでもスマホを離せない親を見ることがある。わが子のプレイを生目の目で見続けてほしい。